



【特別寄稿】  
**REPORT**日本スキー研究会

文=志賀仁郎

国際化、ジャンプの質の向上、  
そしてスキーフアンのために。  
技術選は何を目指すべきなのか



今シーズンの終わりも間近になった  
4月16日から18日にかけて、  
長野県野沢温泉村で日本スキー研究会が開催された  
日本スキー連盟教育本部の首脳と有識者が集まり  
教育本部の今後の方針を決定するこの会議で  
議題の中心となったのは  
「技術選を今後どうするか」ということであった。  
日本スキー研究会に参加した志賀仁郎が、  
そこで提示された技術選の課題について、  
スキージャーナリストの立場からの提言をする

# 技

術選は、野沢温泉で再生され、国際的にも認知されるであろう行事となった。日本のスキー界には、ここから始まる次の時代に向けて、技術選をどうするかを考えることが求められている。

日本に発想を生み、日本にしかなかった技術選という競技会は、新しいスタイルのスキーの競争として、この数年ヨーロッパ、アメリカ、カナダなどのスキー先進国と呼ばれる国々の人々の関心を集めるようになった。かつてヨーロッパの人々は、日本にしかない競争があり、その競争で認められたスキーヤーたちが、オリンピックやワールドカップに出場する選手よりも高い人気があると聞いて、「そんな、馬鹿な」と驚き、日本の特異なスキー界に戸惑っていたのである。しかし、その技術選が、世界最大のスキーマーケットとなった日本のスキー界の動向を左右するイベントである、とする情報が伝えられるに及んで、にわかに関心を集めるようになったのである。

5年前、オーストリア、イタリヤ、フランスから12人のスキーヤーが外国人選手として初めて技術選に参加。オーストリアのスキー教師、フランチスカ・クラスニツァーが、女子第1位となる。そして翌91年には、ワールドカップのスラローム・チャンピオンであったマテヤ・スヴェートが参加し、女子の第1位となる。以来、ヨーロッパ、アメリカから数多くのトップスキーヤーたちが参加し、技術選の上位を寡占するという状況が生まれている。その結果は、ストレートに日本のマーケットに反映して、彼らを送り込んだスキーメーカーの製品の売り上げを伸ばしている。現在の技術選は、誰がうまいスキーヤーなのかを見極める競技会であると同時に、スキー業界の動向を左右する、新製品の発表会としてスキー商戦の最前線ともなっている。こうした技術選の商業化の流れの中で、これからの技術選のあり方を考えることも、また重要なテーマとなるはずである。

私は前回(小誌5月号)の中で、技術選の未来へ向けての提言を行なったが、その提言

の中では技術選は将来、全日本スキー技術選と国際スキー技術選のふたつのイベントにわけられるべきだと述べた。その要旨は、「技術選を全日本技術選と国際技術選にわけて開催したらどうか。日本のスキーの風上の中で醸成されてきた、日本のスキーヤーの頂点を選び出す全日本選手権を行ない、そこで上位を占めた何十人かを、外国人選手たちが出場する国際技術選に日本の代表として出場させる」という考え方であり、この分離が行なわれるようになれば、今年、野沢での技術選に感じとれたシラケムードも払拭されるだろうとしたのである。

この私の提案は、過日、野沢温泉で開催された日本スキー研究会のテーマのひとつとして活発な論議が交わされることになった。果たして国際技術選は、開催できるだろうか。開催するとすれば、どんな問題が派生するだろうか。いずれ、国際技術選は開催されなければならぬだろう。その時のために、十分な検討を行なっておく必要がある。このような考え方が、日本スキー研究会での合意となった。

全日本技術選と国際技術選の分離開催は、日本のスキー界に何をもちこたせようか。5年前、八方尾根での技術選で、渡辺一樹と佐藤譲がトップを争った、あのムードが再現されるはず、とする意見と、この数年、海外からの一流スキーヤーの参加によってうながされた、日本人スキーヤーの技術水準の上昇がストップするのではないかと危惧がある。そしてスキーメーカーが、この競技会への対応に消極的になるのではないかと考える方も、何人かの委員の間から提出されている。論議は、技術選を新しい魅力ある競技として、スキー先進国の人々にも認められる大会にするために、どう改善し、どのような条件を整った時に分離に踏み切るべきかという積極論と、折角ここまで成熟してきた技術選を、何故手直しする必要があるのか、何故分離する必要があるのか、とする消極論に分かれたということができた。

全日本技術選と国際技術選の分離開催が、

今すぐには実現できそうにもないとする現実論の前に、私は先月号で次のような折衷案を提示している。「もしも、国際技術選の開催が不可能であるとするならば、暫定的な方法として、現在の競技方法をそのまま残し、全日本のタイトルは日本選手に与え、外国人選手は順位は別枠として公表するという、二重の表彰方式を採用してはどうか」と言う提案である。少々情けない折衷案だが、このプランは、さしたる障害もなく行なえるはずである。現に、今シーズン4月以降のスキー雑誌に掲載されたスキーメーカーの広告の中には、「日本人第1位」といった、外国人の順位を別枠にとらえたものがたくさん見られるのである。メーカーサイドは既に、外国人を別枠に考えるといった方向に動き出している。そして日本人選手たちの間にも、「全日本と銘うつ限り、タイトルは日本人だけのものにすべきだ」とする考え方が生まれている。以上のように、こうした全日本技術選と国際技術選との分離についての議論は、もう二年は技術選を従来どおりのイベントとして開催し、表彰方法は暫定的な方式にするという方向に今は集約されようとしているのである。

# 外

新入の参加を認めるときに、技術選は、その軌道に合わせたもので、そのメーカーの努力で、有力な外国人選手が出場する様になった。ここで「全日本のタイトルは外国人には与えない」とする決定を下せば、外国人を投入したメーカーは、技術選から手をひいてしまおうだろう。少なくとも、技術選への対応は、さめたものになる、といった危惧を語る人がいる。

しかしながら、私は、その慎重論は杞憂と考える。分離開催となれば、メーカーサイドは、日本人スキーヤーの養成に再び力を注ぐはず、また同時に有力な外国人の投入にも熱を入れてくるだろう。

現に、メーカー側のプロバガンダが既に「技術選第1位獲得」としてベルント・グレイバーの姿を押し出すメーカーがあり、「技術選日本人の第1位」として栗野利信を称賛するメーカーがあるのである。

外国のメーカーでも、その自国でのPRに日本で行なわれる全く新しい競技の勝者たちを起用する可能性は高い。私はそうしたメーカー側の対応は、必ず起きると考えている。



かつて、フランスのナショナルチームが崩壊した時、フランスのメーカーは、それ以前世界のトップレーサーとして人気のあったレーサー連を、スキー教師に転向させ、スキー教師の視察レースに出場させ、チャンピオントゥ・モニターとして大きなホスターで自社の宣伝に使うといったやり方で、自社のスキーのPRを行っていた。

日本で行なわれる国際技術選は、海外のブランドにとっても魅力のあるタイトルになるはずである。

「ギセン」という言葉が世界中の人々の口に登る日は必ず来ると考える。

**日** 本スキー研究会の論議の中では、技術選をさらに前進させるための具体的な提案がいくつか提出された。そのひとつは、もう一度、種目を見直す必要があるのではないかという提案であった。そして、より斜面の難度を高めるとする考え方も出されている。野沢での技術選の成功は、難度の高い斜面で、より高い技法を導き出す種目の設定によってもたらせられたとする認識に立ち、次回からは、その斜面の難度をさらに高め、地形のうねりやねじれといった斜面状況を生かしたコースで競技を行なう、とする合意が得られたのである。

さらにこの数年、選手会などで問題となる最終種目の大回転の扱いをどうするかという議論がなされ、廃止してはどうかという意見を含めて、多くの意見が提出された。「スタート順は、それ以前に終了した段階での成績順にする」といった案や「大回転は順位の様式にせず、エキシビジョンレースのような形式だけで行ない、別途に大回転だけ切り離した表彰をする」といったプランが検討されている。私個人としては、大回転を最終日の最終種目として開催し、別途に表彰するというプランに賛成したい。そうすれば従来のように転倒やコースアウトで、それまでの全ての成績を失う、という選手たちの心理的な不安を解消でき、大回転はより単やかでスリリングな種目となるはずである。

また、各種目のスタート順も「前年度の成績に依じたシード制」が検討されているとの意見が、大回転のスタート順の話の際に提案された。他に、予選の成績によって準決勝のシードを決め、準決勝の順位によって決勝の点を可能にするという方式が、より公正な採点されているのである。

これらの、すぐにも解決可能な諸問題には、今後すみやかに改善がなされることを期待しよう。

## 前

回の技術選への提言の中で、私は尾瀬岩波での技術選が終了したときにあった五つの問題点のうち、斜面の難度を高めること、種目の見直しを図ること、出場者数を絞り込むことの3点については、野沢での技術選で満足できる状況になり、残る審判員の再教育ということも、ほぼ納得できるレベルにあったと報告した。今年の技術選が終了した時に行なった、審判員たちとの座談会（小誌5月号）の中でも、審判員の自信が読み取れたことと思う。しかしながら、その後合った何人かの関係者の話、そして日本スキー研究会の話し合いの中で、今なお審判員に対する不信、あるいは疑問がくすぶっていることを知らされたのである。

疑問とされる点を整理してみよう。

① 審判員はどのような基準で選ばれているのか

② 審判員の中にはメーカーとのつながりの強い人物がいる

③ 審判員の中に、外国人や外部の有識者を入れるという考えはないのか

④ 審判員の採点に疑問や不満がある場合に、チェックする機関はあるのか

⑤ 審判員を増員して、精神的、肉体的な負担を軽減することを考えるべきではないか

現在の審判員は、元デモンストラーターで、強化コーチあるいは専門委員の資格を持つベテランたちが主流である。また、デモンストラーターの経験を持っていない何人かは、オ







ある。メーカーとのつながりを断てというこ  
とは、ないものねだりにしかならないはずだ  
私は、この問題は審判員に選ばれた人の自覚  
と自製の問題だと考えている。彼らは、日本  
のスキー界の将来を担うエリートなのだか  
ら。

③の審判の外部からの導入の問題は、もし  
も国際技術選というものが発案され、実現す  
るためには、当然考慮されなければならぬ  
テーマであろう。かつて私は、前走者として  
参加した、何人かのオーストリア、ブンデス  
ハイムの名手たちに、審判をやってみたいか  
と聞いたことがある。彼らの何人かは「もし  
も要請があったなら、ぜひやってみよう」と  
語っている。彼らの視点で採点したら、また  
新しい技法となる要素が発見されると思う  
考えてみて良いポイントであろう。

④の審判員を監視するシステムを、という  
提案には、現審判員たちの「それなら、その  
人たちにジャッジをさせたら良いではない  
か」という反発が予想される。相撲の検査役  
のような存在は果たして必要なのだろうか。  
現行の審判長と5人の審判員との間に信頼関  
係がある限り、その必要はないと考えるのだ  
が。

⑤の審判員の増員の問題は、そのとおりと  
いう指摘であろう。現在の10人の審判員を倍  
の20人程度に増員すべきであろう。

こうした審判員制度見直しの問題は、時間  
をかけ、多くの意見を検討して、新たな方針  
を決めてほしい。技術選をより高めるための  
最大のテーマであるはずだと、私は考える。

## 技

技術選をどうするかという論議の中に、  
一般のファンに対するサービスは再考  
しなければという意見も多く出されている。  
従来、技術選はファンに対するサービスがま  
ったくない競技会であった。スタートリスト  
も与えられず、わけの分からぬローテーシ  
ョン方式に戸惑い、聞きとりにくいアナウン  
スは耳をそば立て、とファンにとってこの競  
技会は苦痛に耐えるしかない大会であった。  
せめて場内アナウンスだけでも、もっとわか

りやすいものにする必要があるであろう。選  
手の性と名とを読み上げ、所属チーム名を伝  
えることなどはすぐにでも可能であろう。各  
段階でのスタートリストも、無料で配布する  
ことも検討されて良い。技術選の盛り上げは  
コースを囲むファンの数と、その声援によっ  
て得られるはずのものであるからだ。SAJ  
及び、開催地の組織委員会の再考を求める声  
は高い。

来年の第33回技術選が北海道のルスツリ  
ートで行なわれるという噂は、噂ではなくS  
AJの決定事項として報じられている。しか  
しそれは、次回開催地として名乗りを挙げた  
のが、今のところルスツリートだけであり、  
他に候補地がない限りSAJ教育本部では、  
ルスツリートで開催したい、ということとな  
るのだが……。「八方尾根や野沢温泉なら、あ  
の大観衆が集まるけれど、そんなに遠い、行  
くにお金のかかる場所へ移ったら、誰も見  
に行きませんよ。それは、大鷲や網張、そし  
てルスツで技術選をやったときの、あの寂し  
さでもうSAJだってわかっていっているのでな  
いんですか」というのが、一般的な意見であ  
ろう。もしも、ルスツリートでの開催がす  
でに動かないものとするならば、SAJはど  
のような対応で、第33回技術選を野沢での成  
果を越えるものに仕立て上げるのだろうか。  
斜面を八方尾根や野沢温泉並みの難度にする  
ことはできないのは自明のことである。そう  
である以上、人為的にも工夫をこらして、日  
本、を争う技術選の舞台にふさわしいものに  
する必要があるのである。その上で、その状況  
に合わせた競技種目の選定を考えなければな  
らないだろう。与えられた斜面を、どう滑る  
かが試される技術選は、予定される会場で、  
どのような種目を採用するのかを試される行  
事となったのだから。

つながりを持つことができた野沢温泉として  
は、これからもその絆を大切にしていきたい  
この願いを聞いて、私は「野沢温泉で第一回  
の国際技術選を開催してはどうですか」と話  
した。そして、どんな国際技術選にしたら  
いか、そのプランを野沢温泉の人々と語り合  
ったのである。

日本スキー研究会での私の提案は、来シ  
ズンの全日本技術選、デモンストラーター選  
考会を終えた後の日程で、国際技術選を野沢  
温泉で開催する、というものである。そして、  
国際技術選は全日本技術選の日本入上位選手  
（約20名程度）と海外からの招待選手20名程  
度の参加者で行なう。審判員の中には、海外  
スキー指導者、研究者を加える。採点方法は、  
従来の日本の技術選に準ずるものとするが、  
海外からの審判員と話し合ってより良いもの  
とする、といったものであった。ある委員か  
らは、オーストリア、フランスといったスキ  
ー先進国からの選手ばかりでなく、アジア地  
域のスキーヤーにも呼びかけてインタースキ  
ーに参加した全ての国々の人々を集めたら、  
という意見も出され、日本スキー研究会のメ  
ンバーたちは、その国際技術選の実現に積極  
的な姿勢を見せていた。

技術選の将来をどう見据えたいかという論  
議は、この委員会での討議をキッカケとして、  
更なる高まりを見せるに違いない。今、時代  
は価値破壊が進み、北海道3泊4日で3万円  
をというような格安ツアーがある。ルスツ  
を見よう」といったプランを、SAJは考  
えてみるべきだろう。

## 「日本スキー研究会」

SAJの教育本部主催の会  
議で年に一回シーズン終了  
の時期に開かれている。参  
加者はSAJ副会長、理事、  
教育本部各委員長、歴代教  
育部長を含む顧問、アドバ  
イザーで約20名程度の構成  
となっている。  
教育本部の方針、方向を  
決める重要な会議である。

1 ストリアの国家検定教師の資格を持つ専門  
委員である。わずか10名で、4日間のすべて  
の競技を審判するというのは、彼らにとって  
かなり過酷な作業であろう。この際、審判員  
選出の明確な基準を作って、より多くの人材  
を確保し、その上で十分な教育・研修の期間  
を与えて、より公正なジャッジの実施を望め  
ないだろうか。

②のメーカーとの関わりの問題は、重いテ  
ーマであろう。「審判員のはとんどが、関連  
メーカーのひもつきではないか」という指摘  
もあり、あるSAJの役員は「審判員の中に  
は、メーカーから「苦勞さん」料が支払  
われている」という人すらいる。こうした事  
実は、技術選に対する不信感として、浸透し  
ているように見える。審判員の選出に対して  
は、より慎重に透明性を確保してほしい。し  
かしながら、審判員に指名されるレベルにあ  
るスキーヤーが、業界とのつながりをまったく  
持っていない、などと考えるににくい状況が